

## 還曆雑感



富良野医師会  
ふらの西病院

櫛 部 朗

今はどうなのか分かりませんが、私が国家試験を受けた時（昭和56年）には、試験の終わったその夜に道内3大学の学生が集まり懇親会が開かれました。北大医、札医大の皆さんが壇上で校歌を歌い、わが旭医の番が来ましたが校歌そのものがまだなく（今はあります）、代わりに森田公一氏の青春時代という曲を歌いました。たぶんカラオケをみんなで歌って盛り上がった曲だったのだとは思いますが、校歌のない哀しさを感じたことを今でも覚えています。

さて、その青春時代に「青春時代が夢なんてあとからほのぼの思うもの～」というフレーズがあります。若いころを思い出すには相応の齢を重ねてはありますが、私の場合には多大な後悔と、恥ずかしさと、少しの痛みを伴い、あまり昔を懐かしむ気にはなれませんでした。

「経験は最良の教師だ。しかしその授業料はいつも高すぎる」という言葉を引き合いに出すまでもありません。しかしながら還暦を迎え気持ちを新たに、詳細は忘却の彼方へ追いやり、失敗から得た教訓めいたことのみ体に染み込ませて進んで行こうと思っています。

話は変わりますが、私の人生で大きな位置を占めるものにサッカーがあります。サッカーを始めたのは中学1年、メキシコオリンピックの年（1968）で、第1次サッカーブームが起こる少し前でした。全く個人的で申し訳ありませんが、(草)野球少年だった私がサッカーをするに至る経過を少しだけ綴りたいと思います。

私は札幌の大通小学校に通っていました。残念なことに校舎はもちろん、名前さえも残っていませんが、今の札幌高等裁判所本館のある大通西11丁目に校舎がありました。道路を1本挟んで大通公園です。今とは違い、昭和40年代前半ごろまでは、あたりの公園は芝と芝のはげたところが混在した広場で、子どもが遊ぶには最高の場所であり、毎日のように仲間と野球に励んでおりました。夕刻になりテレビ塔の電光掲示がくっきりとしてくると解散。担任の先生が帰る時にもまだ遊んでいるとあきれられたものです。当時はまだ少年団などはなく、もちろん指導者もいません。代わりに会社帰りのサラリーマンや、近くのホテルのクックさんたちが審判をしてくれたり教えてくれたりしました。大人に教えて

もらうことは子どもにとっては大変うれしいことでしたが、幸か不幸かピッチャーをやっていた私にカーブの投げ方を教えてくれる方がいました。運動神経は悪い方ではなかったのですぐにマスターし、おもしろいように球は曲がり、おもしろいように仲間のバットは空を切り、野球好きの先生にも驚かれ、調子に乗って投げ続けていました。しかしながらそのうちに右肘の痛みを覚えるようになり、それでも遊びたい気持ちが強く無理をし続けた結果、この先本格的な野球はできないなと子どもでも分かる状態となりました。

曲がった肘を抱えたまま中学に進学。スポーツ系のクラブに入るのは当然と考えておりましたから、どこにしようか、肘のこともあり悩んでいたときに、白いシャツ、青い短パンで校庭を走り回る先輩の姿がとてもカッコよく映り、それがサッカー部と知り即断即決。その後、高校、大学、社会人と今に至るまでサッカーとのかかわりは続きます。

ところで、日本のサッカー史上最高の選手の一人に釜本邦茂氏がいます。メキシコオリンピックで活躍し、サッカー後進国のアマチュアでありながら当時の世界的な指導者からもその素質は高く評価されていました。ところがオリンピックの後まさに世界へ羽ばたこうという時に肝炎を発症し、海外でプレーすることを断念せざるを得ませんでした。その釜本選手も少年時代は野球をしていましたが、ある時、世界のスポーツはサッカーだ、将来海外へ行きたいのならサッカーをやれと先生に言われて転向したそうです。サッカーをやっている最もよかったことはとの質問に、いろいろな人に出会えたことと答えています。

釜本選手とは比べものにはなりません、私もサッカーを通じていろんな人と出会い、今もたくさんの先輩、後輩、仲間と知り合いお付き合いさせていただいております。外科医の道に進んだのも大学時代、外科のM教授がサッカー部の顧問をされていたことに関係しています。

人生は人とのつながりを縦糸に、時間を横糸に織り込まれていく織物、どんな綾をなしていくのか本人にも分からないもののように思えます。大通公園で会社帰りのどなたかが私にカーブの投げ方を教えてくれなければサッカーをすることもなく、大げさかもしれませんが違った人生を歩んでいたでしょう。自分も知らないうちにどこかの誰かの人生を修飾してきた可能性があることを思うとき、少なくとも悪い修飾だけはしていませんようにと願うばかりです。

冒頭に述べたことに加え、今までの人とのお付き合いを宝物に、新しい出会いを楽しみにして残りの人生を歩んでいきたい、というのが還暦を迎える年の新たな思いであります。